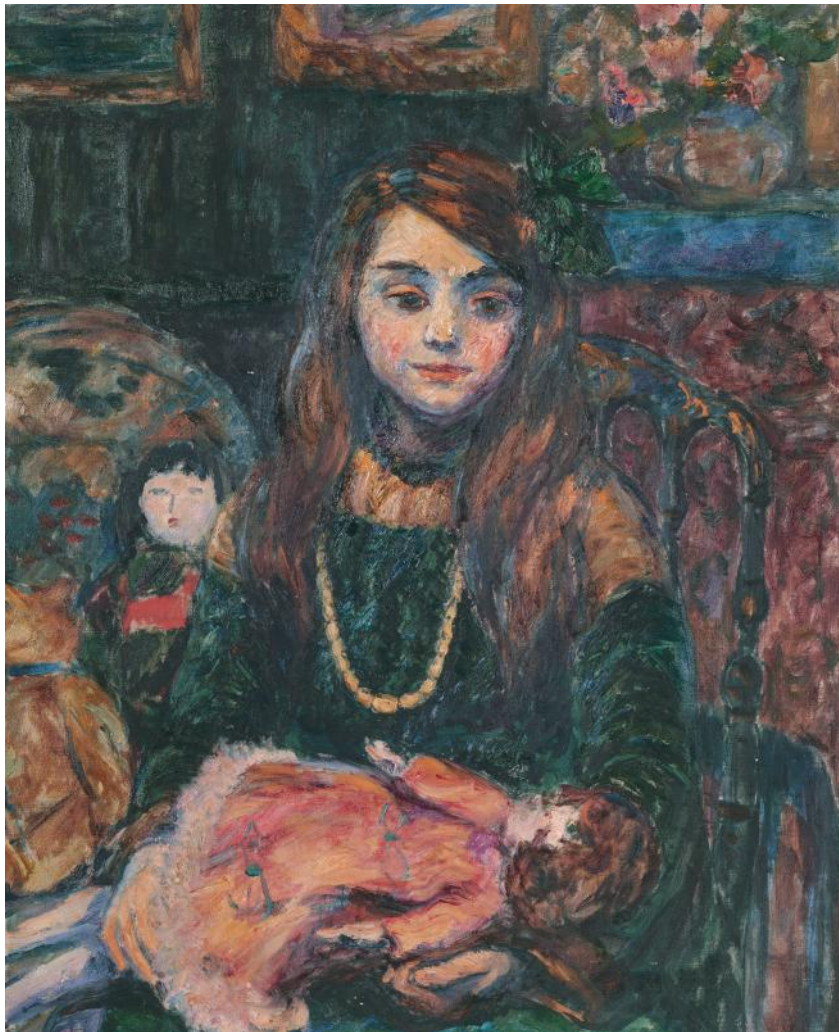


NARIWA MUSEUM

高梁市成羽美術館 だより

NO.35◆2019.3

編集・発行：高梁市成羽美術館
〒716-0111 岡山県高梁市成羽町下原1068-3
TEL 0866-42-4455 FAX 0866-42-4451
<https://nariwa-museum.or.jp/>



児島 虎次郎
《人形を持てる少女》
1920年頃 個人蔵

児島虎次郎

ふるさとに愛されて

2018年4月28日「土」～7月8日「日」

当館が顕彰する洋画家 児島虎次郎（高梁市成羽町出身・1881～1929）は、

欧州留学を経て色彩画家として開花、日本に印象派の画風をもたらしました。彼は、大原孫三郎の支援により世界各国で研鑽を積み、主にパリのサロンで活躍しましたが、倉敷を活動拠点とし生涯岡山の地を離れることはありませんでした。そんな児島虎次郎の遺作絵画の一部は、現在岡山の企業・団体・個人の所有となり、大切に守られ今も人々に愛され続けています。本展覧会では、各所蔵先の御協力のもと、これまで公開機会の少なかった児島虎次郎作品を展覧し、その作品世界を改めてご覧いただきました。

会期中5月27日（日）には、児島虎次郎の孫である児島塊太郎氏（陶芸家・倉敷芸術科学大学副学長）による記念講演会を開催しましたので、以下に講演要旨を紹介いたします。

「児島虎次郎の大作

《奈良公園》を考える」

児島塊太郎

《奈良公園》は、児島虎次郎の生涯の作品の中で一番大きなものと言えます。高さ86・5cm、横が総計約15mと、非常に長い三部作です。この作品が描かれた背景についてご説明します。

虎次郎は1908年（明治41）に最初のヨーロッパ留学を果たします。船旅でマルセイユに着き、マルセイユ港の高台にあるロンシャン宮殿でシャヴァンヌの《マルセイユの図》という巨大な壁画と出会い衝撃を受けます。その後も、ヨーロッパ各地を

旅し美術館や教会で巨大な作品を見ることになりました。

さらに大きな出会いは、1919年（大正8）2回目の留学でモネを訪ね、その作品の蒐集にあたったことでした。当時のモネは既にヨーロッパ画壇の長老となっていて、画商を通じてでなければ作品を手に入れる事が出来ません。しかし虎次郎は、モネ自身から直接作品を手に入れることを考え、パリ郊外のジヴェルニーのアトリエを訪問しています。その時、モネは終生の大作である《睡蓮》の絵を描いている時で、アトリエを訪ねた虎次郎を温かく迎え入れ、モネ自身が庭やアトリエを案内して《睡蓮》の大作すべてを見せてくれたそうです。この時の虎次郎の衝撃は計り知ることではできませんが、私は重要な出会いだったと考えています。この時見た《睡蓮》の作品は、今、パリ市内のオランジュリー美術館に展示され、多くのモネファンを魅了しています。

虎次郎はこうした出会いの中で、ゆくゆくは自分も壁画に取り組みたいと思ったはずです。そしてそのチャンスは、意外と早く訪れることになりました。大原孫三郎が大阪の上本町に別邸を建てることになり、虎次郎がその監修と作庭をはじめ、別邸の応接間に展示する絵を担当することになります。

部屋の正面の壁はアマン・ジャンに描いてもらうこととし、1922年（大正11）再び虎次郎は、ヨーロッパ絵画の蒐集の旅に出かけます。アマン・ジャンの《ヴェニス祭》はこの時に注文され、虎次郎の《奈良公園》も《ヴェニスの祭》に合わせて制作さ

れたことが分かります。

虎次郎の日記には、それぞれの作品を展示してみて、自分の作品がアマン・ジャンの作品より色が明快すぎることに、調子が強いので調整したことが記載されています。作家がすでに完成させた絵を再度手を加えて調整することは、かなり勇気のいることだったと思いますが、師であるアマン・ジャンの絵を優先したことが窺え、虎次郎の人となりを理解する事が出来ます。

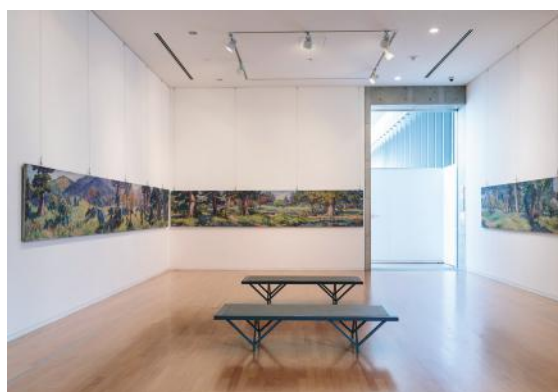
さて、皆様はなぜアマン・ジャンが「ヴェニス」を題材にしたと思われませんか。私の想像ですが、ヴェニスは水の都として大変有名です。そして商人の町でもあります。大阪はどうでしょう。ヴェニスと同じように水の都と呼ばれ、特に道頓堀、日本橋、戎橋など有名どころです。虎次郎は、特別注文の作品をアマン・ジャンにお願いしているのですから、大阪別邸建設の場所について詳しく説明していると考えます。こうした虎次郎の説明を受けたアマン・ジャンは、ヴェニスを題材にして作品を制作することを考えたのではないかと私は推測するのです。

一方、虎次郎はと言いますと、「奈良」に題材を求めています。奈良は大阪のすぐ北にあり、大和の国（平城京）があった場所でもあります。公園の周りには今でも興福寺、東大寺、春日大社、若草山、春日山などがあり、当時の様子を彷彿とさせる風景が広がっています。しかし、虎次郎はそうした寺社を描くのではなく奈良公園に広がる美しい自然と鹿しか描いておらず、日本の原風景を描くことでヨーロッパの風景を描いた《ヴェニスの祭》に対比させようとしたのだと思います。晩年に虎次郎が求めた、ヨーロッパの絵画技法、つまり油絵の具をもって日本風景や自然をどのように表現す

るのか、垣間見えてくるのではないかと思っています。

私は、いつかこの虎次郎の《奈良公園》とアマン・ジャンの《ヴェニスの祭》を同じ空間に展示する展覧会をしたいと念じております。

倉敷芸術科学大学副学長 児島塊太郎



《奈良公園》1924年 大原美術館蔵 本展での展示風景

「児島虎次郎

ふるさとに愛されて」を開催して

2018年春、高梁市成羽美術館で開催された「児島虎次郎ふるさとに愛されて」は、私が美術館人として20年来児島作品を調査する中で出会った優品を一堂に展覧した企画展覧会です。

調査に際しては、あるコレクターは「絵も気に入っているが、ふるさとの画家という意味でも手元に置いておきたかった」と、またある企業では応接室などに掛けられ、他所からの来客を「児島作品でもてなし



《婦人座像》1908-12年頃 個人蔵

①時代を映す魅惑の肖像画
 児島は生涯に多くの肖像画を描きました。今回は、画業の各期の存在感際立つ女性像が会場を彩りました。最初のベルギー留学期(1909~1912)に親交を結んだ女性を描いた《婦人座像》和服を着たベルギーの婦人》には、美しさとともに芯の強さを宿す瞳を、2回目の滞欧時(1920年頃)にパリで描いた《手鏡を



《厨房》(下絵) 1920年 当館蔵



《厨房》1920年 大原美術館蔵

②下絵と本画
 絵を描く際、画家が制作のプロセスとして取り組む下絵や習作(練習用・構図考案用)は時として完成作品よりも味わい深いものです。モデルの表情や服装、調度品の配置など双方を比べると細部にまで画家のこだわりが見られ、中には制作へのリアルな息づかいすら感じられるものもありました。展覧会では《厨房》《コーヒーを飲む婦人》《三橋玉見像》《金魚の池》《牡丹の帯》《奈良公園》の5作品の制作過程をご覧いただけます。

持つ婦人》《厨房》《コーヒーを飲む婦人》などは、当時のヨーロッパファッションの様相をよく映しており、児島のファッション感度の高さも見受けられます。また、あどけなさの中にも妖しい魅力をたたえた《人形を持つ少女》は、背景に日本人形が描かれるなど、20世紀初頭のジャポニスム(日本趣味)も伝えていて親近感も覚える1点でした。
 *表紙作品

③大作《奈良公園》のパノラマ展示
 児島虎次郎が大原家から依頼を受けて制作した総計約15mの《奈良公園》は、大阪の大原家別邸を飾る壁画として描かれたものです。展示を設える中、当時の壁画プロジェクトのスケール感にはただ圧倒されるばかりでした。大原家が児島という画家をいかに信頼していたか、そして先見性とそれを実現しうる資金力。西欧の芸術様式をもつて作り上げられたこの部屋は、当時関西財界においても大いに耳目を集めたにちがいありません。邸宅建設という実業家の一大プロジェクトに児島は全身全霊で応えたのでした。
 同郷のよしみなどといいますが、「ふるさと」という感覚は、気になる、縁を感じてしまう、親しみを覚えたり温かい気持ちになったりと、人の心に作用する濃いキーワードといえるでしょう。地元出身の画家を大事に思い、その作品を掲げることが、企業であれ教育機関であれ「地域とともにある」という気概そして親愛の表れと受けとれます。一枚の絵をきっかけに人々の会話が生まれ、交流が育まれてゆくとしたら、芸術家を生む土壌を持つその地域は、感性の鉱脈深く創造性に富む希望に満ちた場所といえるのではないのでしょうか。今回の展覧会は、公開機会の少ない貴重な児島作品をいくつかの観点で紹介した機会でしたが、作品との出会いとともにこの画家を生んだ私たちが暮らす場所(高梁・倉敷)へも思いを致していただけたならば、企画者としてこれ以上の喜びはありません。

元高梁市成羽美術館副館長・学芸員 渡辺浩美
 (高梁川流域連盟機関誌「高梁川」第76号より転載)

ミュージアムコンサート in 成羽美術館

2018年も当館ではミュージアムコンサートを行いました。6月に開催した弦楽アンサンブルのコンサートは、2017年にも当館で演奏していただいた、岡山を拠点に活躍中の若き演奏家ユニットアンサンブル・ジャガーが再び登場。今回はNHK交響楽団首席コントラバス奏者の吉田秀さんがゲストに加わり、さらにパワーアップした演奏を披露してくださいました。吉田さんがソロを奏する「アヴェマリア」は、コントラバスの深く優しい音色が際立ち特に印象的でした。



6月23日(土)開催

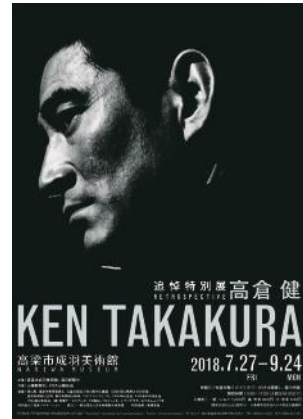


11月25日(日)開催

晩秋に開催した歌(脇本恵子さん)・ファゴット(小野エリコさん)・ピアノ(上森佳枝さん)によるコンサートの、童謡「もみじ」「赤とんぼ」、山口百恵の「秋桜」など皆さんおなじみの秋の名曲を中心としたプログラム。肌寒くなった季節、身体の芯に沁み込んでいくような歌声と、温もりがありながらもどこか哀愁を感じさせるファゴットやピアノの音色をお楽しみいただきました。

追悼特別展 高倉健

2018年7月27日〔金〕～9月24日〔月・振〕



展覧会ポスター

展覧会開催前、西日本豪雨で高梁市をはじめ岡山県下に甚大な被害が出ました。そのような状況下での開催の可否について苦慮しましたが、この様な時こそ私たちにできることを着実にすべきだと考え、何とか開催にこぎつけました。

本展は、任侠映画で一時代を築き、数多くの名作や話題作に出演し、晩年は最も出演が待ち望まれた俳優 高倉健の貴重な映像と資料をもとに、その業績を顕彰しようというものでした。会場に22台のモニターと7台のスクリーンを設置し、高倉健出演の205作すべてからの抜粋映像を紹介しました。会場の一部屋では、壁や天井にまで高倉健主演の任侠映画の予告編を大音響とともに映し出し、大変好評を得ました。

会期半ばに開催したトークイベント「健さんを語る 岡山の仲間たち」では、健さんのデビュー作からの映画11本に関わり、その内『東京丸の内』では監督を務められた小西通雄さんに、若き日の健さんの実像を思い出深く語っていただきました。また岡山在住の健さんファン3人からは、それぞれの健さんへの想いを語っていただき、会場に詰め掛けた多くの健さんファンとの熱い交流も見られました。

このイベントと共に多くの方に喜ばれたのは、開催直前に岡山県内在住のご所蔵者からご連絡いただき展示がかなった「健さん着用のジャケット」でした。最後の主演作『あなたへ』で健さんが着ていたベージュのジャケットです。映画のイベント（絵手紙コンクール）の最優秀賞として贈られたもので、健さんからの手紙も添えられていました。このような岡山ならではのイベントや展示品が、展覧会の好評に結びついたと思います。

会場の一隅に用意したノートに書かれたお客様の感想を読むと「遠くまで来て良かった、これから生きてゆく励みを感じた、健さんありがとう、この展覧会を開催してくれてありがとう」と感謝の言葉に満ち溢れており、主催者としてこの上ない励みとなりました。



会場風景



横尾忠則による編集映像を室内全面に投影する大迫力のインスタレーションも。



9月1日(土)開催
「健さんを語る 岡山の仲間たち」

高倉健展会期中、西日本豪雨災害への募金活動を実施し、ご来館いただきました皆様より義援金をお預かりいたしました。おかげさまで152,065円の義援金が集まり、10月17日に高梁市へ寄付させていただきました。

ご協力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。

「NARIWA FLORA」プロジェクト



ショップに並んだグッズたち



8月4日(土)開催
学生によるグッズ発表会

2014年に始まった、岡山県立大学テキスタイルデザインコース3年生とのグッズ開発「NARIWA FLORA」(ナリワフローラ)プロジェクトも、今回で5回目。成羽の植物化石をはじめ、当館のコレクションをモチーフにさまざまなグッズをデザイン・販売する共同企画です。もう5回目だし、さすがにネタも尽きてくるかな?と思いきや、学生さんたちの若いアイデアは予想をいつも上回ります。そう来たか!と驚嘆するの喜びは、きつとグッズを手にした方にも伝わるはず。ポップでカラフルな絵葉書、Tシャツ、バッグにハンカチやポーチなどがショップに並べば、一気に華やかな雰囲気。今年もたくさんの方に購入していただきました。

成羽の植物化石は、人によってはとっつきにくいものかもしれません。しかし、このようなグッズを通してみると、ぐっと身近に感じられることでしょう。特に未来のデザイン界を牽引するであろう若い方々の、来館者目線に立ったデザインは大変貴重です。しかもひとつひとつ学生さんたちが丁寧に手作りしているとあれば、量産品には歯が立たないほどの付加価値も。今年も秀逸な作品ばかりでした。

本プロジェクトは来年度も続きます。次回からはなんと県大新チームも参戦予定!どうぞお楽しみに!

画家岸田劉生の軌跡

——油彩画、装丁画、水彩画などを中心に

2018年10月6日〔土〕～2019年1月14日〔月・祝〕

岸田劉生展を開催して

2019年は、岸田劉生と児島虎次郎ともに没後90年を迎えます。1929年の3月に虎次郎、12月に劉生が亡くなっており、近代美術史に大きな足跡を残した二人の画家が同年に生涯を終えています。

劉生は近代日本美術において最も個性的な画家の一人であり、38年という短い生涯の中で極めて振幅の大きい道をたどりながら、同時代やその後の多くの画家に多大な影響を与えた人物です。その画家の軌跡を、笠間日動美術館の協力を得て約150点の展示作品からご覧いただく内容としました。

劉生と言えはやはり「麗子像」が有名であり、劉生最晩年の油彩画《麗子十六歳之像》や、木炭とコンテで5歳の麗子を



会場風景



10月28日(日) 記念講演会
「岸田劉生の日本画について」

講師：谷藤史彦氏(ふくやま美術館相談員 前副館長)



12月1日(土) 人物画ワークショップ
講師：寺尾佳子氏(画家)

描いた《麗子之像》をはじめ、日本画や装丁画、版画に描かれた麗子像を覗いていくと、そのまま劉生の絵の変遷をたどることとなります。日本画に描かれた麗子には、浮世絵風や中国の宋元画風もある中で《寒山風麗子像》のような一見グロテスクともいえる妖気漂うものもありました。

本展のもう一つの見どころは、40余点がまとまった装丁画の展示です。装丁画は、劉生にとって「第2の誕生」と言わしめた白樺派、なかでも武者小路実篤との交流から生まれた仕事であり、亡くなるまで15年間続けられました。装丁画は、劉生にとって決して余技ではなく、自らのデザイン感覚と美意識を結集した表現でした。

西洋画を学び画法を若くして会得した

劉生は、写実の妙を追求する中で、それに飽き足らずその後東洋の美に目覚めます。我国の初期肉筆浮世絵や中国画の影響から劉生の言う「卑近美」を表現した作品や、神秘と格調高い宋元画の世界に迫る作品など、実に多彩な仕事を成し遂げた劉生芸術の軌跡をご覧いただきました。

同時代を生きて、同じく画業半ばで亡くなった児島虎次郎も、晩年には東洋の美にაცოგれ中国や朝鮮に度々足を運びました。二人とも西洋画をいかに東洋と融合させるかに腐心したのだと思います。会期中には、ふくやま美術館相談員谷藤史彦氏による記念講演会や、画家 寺尾佳子氏による鉛筆とパステルで和装の人物を描くワークショップを開催、またピアノとファゴットの調べにのせて美しい歌声が響いた秋のコンサートもあり、展示会の作品鑑賞と共に多くの方に楽しんでいただきました。展示会は年を越えて1月半ばまで開催して好評のうちに終了しました。

人物画ワークショップを開催

12月1日(土)、画家の寺尾佳子さんを講師に迎え、ワークショップ「和装の人物を描く鉛筆・パステルを使って岸田劉生に挑戦!」を当館レクチャールームで開催しました。

まず冒頭に、姿勢や道具の使い方など、絵を描く際の留意点について寺尾さんより説明していただきました。参加者の中には、絵を学ぶ学生や、趣味で日常的に絵を描いている方もあれば、絵を描くのは数十年ぶりだという方も。これまでの経験や参加への動機は様々でしたが、イーゼル、練りゴムやパステルといったいわゆる「本格的な」道具を前にして、みなさんの緊張感が高まっていくのが感じられました。そして、いよいよ今回の目玉「実際にモデルを見ながら描く」本制作がスタート。モデルを見つめる視線はみなさん真剣そのもの。会場には熱気が満ち、かすかな作業音だけが響いていました。ピピピッと休憩時間を告げるアラームが鳴れば、「ふっ」と大きく息を吐いて、自分の作品を遠くから眺めたり隣の人と比べて見たり。「うまいなあ」「こどうやって描いたの?」と、参加者同士で和やかに交流する様子も見られました。

最後には、参加者全員の作品を並べて講演会も行い、自分の作品への想いや参加しての感想をお話いただきました。同じモデルを描いているながら、出来上がった作品は十人十色。一人ひとりの個性が光る力作ぞろいでした。照れくさそうにしながらも、構図や色使いで工夫した点など、自分の作品を語る表情には充足感がにじみ、創作の喜びを参加者同士で共有していただける良い時間となったように感じます。

児島虎次郎を偲ぶ絵画展

2019年1月26日(土)～2月17日(日)

平成30年

度の「児島虎次郎を偲ぶ絵画展」は、高梁市内小学校21校から1,207点の応募がありました。審査を経て、各学年で最も優



【児島賞】《守りたい町 高梁》
高梁中学校3年 生田愛美さん

れた作品である「児島賞」、次点にあたる「渡辺賞」などの受賞作品を含む235点多目的展示室にて展示しました。2月5日に表彰式を開催し、受賞者には高梁市教育委員会小田幸伸教育長より賞状と記念品が贈られました。洋画家 片山之男氏より各作品の講評があり、受賞者は熱心に耳を傾けていました。児島賞・渡辺賞受賞者は次のとおりです。(敬称略)

【児島賞】

川上茉鈴(川上小1年)、谷芽吹(松原小2年)、平松紗羅(成羽小3年)、平松 栞(松原小4年)、富弥麻衣(福地小5年)、森下翔太(松原小6年)、小見山日菜(高梁北中1年)、原田和弥(成羽中2年)、生田愛美(高梁中3年)

【渡辺賞】

森下彩名(松原小1年)、塩井莉瑠(中井小2年)、畑香由菜(福地小3年)、新田琉星(落合小4年)、佐棟光希(松原小5年)、福島愛理(落合小6年)、長谷川和輝(高梁中1年)、藤井拓生(有漢中2年)、川相晴暉(高梁中3年)

化石ワークショップ

当館では成羽地域から産出する約2億年前の植物化石を所蔵しており、本年度はそれら化石部門の教育普及に力を入れてきました。その活動の一つとして館内ワークショップ(以下WS)を行っています。以下に主な取り組みを紹介します。

化石トーク

化石展示室にて、学芸員と来館者とが化石について気軽にお喋りをするWSです。話のネタに、世界中のいろいろな実物化石を用意し、眺めたり触ったりしてもらいながらトークします。成羽の植物化石をよくご存じの方から、逆にこれまで化石に親しみがなかったという方まで、老若男女の来館者とお話できました。「意外と重いなだ!」「どこで見つけたの?」「4億年も前!?」など、化石についてさまざまな疑問や感想が飛び出し、ついには知らない者同士で侃々諤々。みんなで語り合う楽しいひと時となりました。



レクチャーの様子



実際に化石を触ってみよう!

アンモナイトのレプリカづくり

成羽美術館のレプリカづくりは、ただつくだけではありません。プロのレプリカ製作者(プレパレーター)が行う方法を学び、レプリカは本物に劣らないほど大切なものであること、本物とかわらないものを作るためには「型」が重要であることを知っていただきます。参加者たちも実際に「型」からつくりますが、正確に



型とレプリカ

加え、速さが命なので真剣な中でも大盛り上がり。レプリカは「偽物」ではなく、化石を研究する一つの手段だと実感してもらえました。

恐竜の骨を『科学的』に描こう!

研究者の中には絵を描くことが苦手な人も。でもそんな研究者も、化石の骨は驚くほど正確に描くことができます。それは科学的に骨を観察し、科学的に推測する訓練をしているからです。このWSでは描画の技術ではなく、科学的に骨を見る方法を体験してもらいました。また、骨格図から生きている時の姿を、骨の位置や筋肉のつき方を考えながら復元。みなさん、骨に穴があくほど観察していました。

来年度も月に2回ほどのペースで定期的にWSを行います。新しいテーマも考案中!子どもから大人まで、みなさまのご参加をお待ちしています!(当館ホームページ・フェイスブック等で情報を発信しています。)

表紙作品解説

児島虎次郎《人形を持てる少女》

1920年頃

油彩・キャンバス 個人蔵

「虎次郎がこんな肖像画を描いていたとは!」。関係者一同、驚きの声を上げた秘蔵の一点です。

あどけなさの中にも妖しい輝きをたたえたその瞳に、絵の前に立つ誰もが、離れがたい気持ちになるのではないでしょうか。亜麻色の髪、深緑のドレス、そして膝の上には薄紅色の人形が描かれ、ネックレスや髪飾りなどが画面を華やかに演出しています。

近づいてみると、顔は特に目を丁寧に描いていることが分かります。いくつもの色を駆使した繊細な肌の表現、絵の具の盛り上がりなど画家が少女の瞳に渾身の力を注いだのだと気づかれます。

モデルの後ろには日本人形も添えられるなど、この絵からは当時ジャポニスムが流行していたヨーロッパの時代感もうかがえます。

(HW)